

## 親の肯定的・否定的養育行動と発達障害児の向社会的行動 および内在化・外在化問題との関連

(中間報告)

弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター	足立 匡 基
弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター	高柳 伸 哉
弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター	吉田 恵 心
弘前大学大学院医学研究科附属子どものこころの発達研究センター	安田 小 響

### Relationship between Parents' Positive and Negative Parenting Behaviors and Internalizing or Externalizing Problems As Well As Prosocial Behavior of Children with Developmental Disorders

Research Center for Child Mental Development,  
Graduate School of Medicine, Hirosaki University, ADACHI, Masaki  
Research Center for Child Mental Development,  
Graduate School of Medicine, Hirosaki University, TAKAYANAGI, Nobuya  
Research Center for Child Mental Development,  
Graduate School of Medicine, Hirosaki University, YOSHIDA, Satomi  
Research Center for Child Mental Development,  
Graduate School of Medicine, Hirosaki University, YASUDA, Sayura

#### 要 約

本研究は、発達障害の診断のある児とその保護者に対して質問紙調査を行い、保護者の養育行動と児の発達特性および向社会的行動、内在化・外在化問題との関連について横断的に検証することで、発達障害における二次的不適応の予防に寄与する知見を提供することを目的に検討を進めている。Autism Spectrum Disorder(ASD)児 21 名、Attention Deficit/Hyperactivity Disorder(ADHD)児 22 名、Developmental Coordination Disorder(DCD 児)19 名を対象とした、これまでの予備的分析からは、肯定的養育行動が ASD・ADHD・DCD 全ての児の SDQ 下位因子「問題行動」と中程度の負の相関を持つことが明らかとなった(ASD 児:r = -.49,ADHD 児:r = -.42,DCD 児:r = -.68)。また否定的養育行動の下位因子「過干渉」は、ASD 児・ADHD 児の挑戦性・攻撃性(Conners3 下位因子)と中程度の正の相関を持つことが明らかとなった(ASD 児:r = .50,ADHD 児:r = .46)。今後は、現在収集中のデータを加え、各養育行動を独立変数、向社会的行動および内在化・外在化問題を従属変数とする重回帰分析へと分析を進め、各発達障害特性において効果的な養育行動のあり方について検証を行う。

## 【キー・ワード】 発達障害, 養育行動, 向社会的行動, 内在化・外在化問題

## Abstract

This study used a questionnaire survey of children diagnosed with developmental disorders and their caregivers in order to cross-sectionally verify the relationship between the caregivers' parenting behaviors and the children's developmental characteristics. In addition, it examined the prosocial behavior and internalizing or externalizing problems of such children with the purpose of providing findings that will contribute to the prevention of secondary maladaptation of children with developmental disorders. The subjects were 21 children with ASD, 22 children with ADHD, and 19 children with DCD. Preliminary analysis so far has found that positive parenting behaviors have a moderate negative correlation with the SDQ sub-factor "problem behaviors" in children with ASD, ADHD, and DCD (ASD:  $r=-.49$ , ADHD:  $r=-.42$ , DCD:  $r=-.68$ ). In addition, the negative parenting behavior sub-factor "over-possessive" was found to have a moderate positive correlation with "defiance/aggression" (Conners3 sub-factor) in children with ASD and ADHD (ASD:  $r=.50$ , ADHD:  $r=.46$ ). Future research will add data currently being collected and proceed with multiple linear regression analysis, with each parenting behavior as an independent variable and prosocial behavior and internalizing or externalizing problems as the dependent variables.

**【Key words】** developmental disorders, parenting behavior, prosocial behavior, internalizing or externalizing problems

## 問題と目的

親の養育行動(parenting behaviors)は子どもの適応や発達に影響を与える中心的な要因として、これまでに多くの研究が行われてきた。近年では、自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder; ASD)や注意欠如多動症(Attention Deficit Hyperactivity Disorder ; ADHD)などの発達障害児を持つ親が子どもの問題行動への対応に苦慮した結果、厳しいしつけや放任などの不適切な養育行動を取り、それが子どもの問題行動の持続・悪化や新たな問題行動の生起に繋がるという悪循環のプロセスの存在が示唆されている(Falk & Lee, 2012)。また、同時に就学後の不登校の背景には、少なからず発達障害もしくは、診断されないまでも発達の偏りが存在している可能性が徐々に明らかにされてきており(塩川,2007), そうした問題の生起プロセスの把握と支援, より早期段階における予防対策の構築が喫緊の課題となっている。

しかし、わが国では、標準化された尺度を用いて養育行動と子どもの発達障害特性や二次障害への影響について実態調査を行い、関連を見出すような実証研究は未着手の研究領域である。そこで本研究は、某市における5歳児発達健診において、要支援および要観察となった幼児の保護者に対して質

問紙調査を行い、親の養育行動と幼児の発達特性および向社会的行動、内在化・外在化問題との関連について横断的に検証を行い、発達障害における二次障害の予防に寄与する知見を提供することを目的として調査を行っている。

本課題の検証仮説は以下の通りである。1.肯定的な養育行動は、発達障害児・および発達障害傾向を持つ幼児・児童の向社会的行動を促進し、内在化・外在化問題を抑制する。2.否定的な養育行動は、発達障害児・および発達障害傾向を持つ幼児・児童の向社会的行動を抑制し、内在化・外在化問題を促進する。また、探索的に検討する課題を以下の通り設定する。3.発達障害区分(ASD, ADHD, 発達性協調運動障害(Developmental Coordination Disorder; DCD))による養育行動の差違と向社会的行動および内在化・外在化問題に及ぼす影響。4.肯定的養育行動の3下位因子(関与・肯定的応答性・意思の尊重)および否定的養育行動の3下位因子(過干渉・非一貫性・厳しい叱責, 体罰)それぞれの向社会的行動および内在化・外在化問題に対する説明力の検討。さらに4.が明らかとなった場合、発達障害児の保護者に対する心理的支援における効果的な方略について考察を行う。

## 方 法

### 1. 対象

2013年度から2015年度中に某市5歳児発達健診における1次スクリーニングの結果、発達の偏りが見られた児童とその保護者、および同健診における医師の診断面接(DSM-5(American Psychiatric Association, 2013)に準拠)の結果、発達の偏り(主診断は、ASD, ADHD, DCD)が見られ、その後の支援の対象となった幼児(調査時点で5歳から7歳の幼児)とその保護者150名程度。このうち今回はASD児21名、ADHD児22名、DCD児19名を対象に、予備的な分析を行った。

### 2. 調査尺度

**2-1.** 肯定的・否定的養育行動尺度(Positive and Negative Parenting Scale:PNPS; 伊藤ら,2014): 国際的に使用されているAlabama Parenting Questionnaire(APQ; Shelton et al., 1996), Parental Bonding Instrument(PBI; Parker et al.,1979), Parenting Scale (PS; Arnold et al., 1993), Parent Behavior Inventory(PBeI; Lovejoy et al., 1999)といった養育行動尺度の因子項目を参考にして標準化された、養育行動の肯定的側面と否定的側面の双方を包括的に評価できる尺度である。尺度は35項目、2次因子構造となっており、1次因子として肯定的行動と否定的行動、2次因子として肯定的行動の下位に「関与・見守り」「肯定的応答」「意思の尊重」の3因子、否定的行動の下位に「過干渉」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」の3因子が設定されている。肯定的養育行動は得点が高ければ、肯定的養育行動を多くとっていることを意味し、否定的養育行動は得点が高ければ否定的養育行動を多くとっていることを意味する。

**2-2.** 日本語版 Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) 親評定フォームおよび教師評定フォーム (Matsuishi et al., 2008) : 児童の行動的・情緒的問題を把握する尺度として欧米諸国をはじめ国際的に研究、臨床、教育など幅広い用途に利用されている尺度であり、わが国においても標準化

され、信頼性・妥当性が検証されている(野田ら, 2014)。尺度は、「情緒的不安定」「問題行動」「多動・不注意」、「友人関係問題」「向社会的行動」の 5 因子からなり、各 5 項目計 25 項目の質問から構成される。

**2-3. Conners3 日本語版(田中, 2011):** 青少年を対象に ADHD および ADHD と共存する可能性の高い関連問題の有無の評価に特化したスケールであり、信頼性・妥当性が確認されている。

### 3. 調査手続き

郵送法にて上述の尺度を対象者に送付し、同封の返信用封筒にて回収を行う。

### 4. 解析方法

ASD, ADHD, DCD の診断ごとに、PNPS6 因子を独立変数、SDQ 親評定・教師フォーム各 5 因子および Conners3 の下位因子「不注意」「多動衝動」「挑戦性攻撃性」「友人関係」を従属変数とするパス解析を行う。性別や月齢、知能指数が及ぼす効果が交絡するものと想定されるため、段階的に媒介変数として投入し、媒介変数が及ぼす間接効果および独立変数の直接効果を検証する。今回は予備的分析として、診断ごとに相関分析を行った結果を示した。なお、予備的分析では、SDQ は教師評定フォームのみを分析の対象とした。

### 5. 倫理的配慮

参加希望の保護者に対し紙面にて調査内容を説明した上で、情報提供や調査結果の匿名化による公開への同意文書への署名を参加条件とし、同意が得られた者のみに実施する。得られた個人情報やアンケート回答について、個人が特定できない形で個別 ID を振って匿名化を行い、データ化された上で保存され、分析においては匿名化されたデータのみを扱う。なお、本研究課題は弘前大学大学院医学研究科倫理委員会での承認を得ている。

## 結 果

PNPS1 次因子の 2 因子と 2 次因子の 6 因子と SDQ 下位因子及び Conners3 下位因子の相関分析を行ったところ以下の結果が得られた。

ASD 児では、「意志の尊重」と「多動・不注意(SDQ)」に大きな負の相関が示された( $r=-.52, p=.019$ )。「肯定的養育」と「問題行動(SDQ)」に中程度の負の相関が示された( $r=-.49, p=.024$ )。「過干渉」と「挑戦性攻撃性(Conners3)」に大きな正の相関が示された( $r=.50, p=.021$ )。

ADHD 児では、「関与・見守り」と「多動・不注意(SDQ)」に大きな負の相関が示された( $r=-.60, p=.004$ )。「過干渉」と「挑戦性攻撃性(Conners3)」に中程度の正の相関が示された( $r=.46, p=.033$ )。

DCD 児では、「意志の尊重」と「問題行動(SDQ)」に大きな負の相関が示された( $r=-.64, p=.003$ )。「肯定的養育」と「問題行動(SDQ)」に大きな負の相関が示された( $r=-.68, p=.001$ )。「非一貫性」と「問題行動(SDQ)」に大きな正の相関が示された( $r=.50, p=.028$ )。「厳しい叱責・体罰」と「情緒的

問題(SDQ)」に中程度の負の相関が示された( $r=-.46, p=.049$ )。「厳しい叱責・体罰」と「多動・衝動(Conners3)」に中程度の正の相関が示された( $r=.46, p=.047$ )。

## 今後に向けて

予備的分析の結果からは、外在化問題において、肯定的養育が抑制する方向に働き、否定的養育が促進する方向に働くという仮説を支持する知見が得られた。一方、内在化問題については、DCD児において「厳しい叱責・体罰」が「情緒的問題」を抑制するという、一見すると厳しい叱責や体罰が肯定的に作用する知見が得られた。しかし、同時に「厳しい叱責・体罰」は、DCD児の「多動・衝動」を促進するという結果も示されており、「情緒的問題」が「多動・衝動性」へと転換されて表出されているとも捉えられる。いずれにしても、予備的分析の段階では、参加者数も少なく検出力も十分でないため、各効果の解釈は限定的なものである。この点は、最終論文において、参加者数を十分に確保した上で、PNPSの下位因子を独立変数とする重回帰分析を行い、養育行動の各因子を相互に統制した形での、向社会的行動、内在化・外在化問題への影響を検証することで、より進んだ議論が展開できるものと考えられる。

## 引用文献

- American Psychiatric Association (2013). Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 5th ed. Washington, DC: American Psychiatric Association; 2013.
- Arnold, D.S., O'Leary, S.G., Wolff, L.S., & Acker, M.M. (1993). The Parenting Scale: A measure of dysfunctional parenting in discipline situations. *Psychological Assessment*, 5, 137-144.
- Falk, A.E., & Lee, S.S. (2012). Parenting behavior and conduct problems in children with and without attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD): Moderation by callous-unemotional traits. *Journal of psychopathology and Behavioral Assessment*, 34, 174-181.
- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田新・野田航・辻井正次 (2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発: 因子構造および構成概念妥当性の検証. *発達心理学研究*, 25, 221-231.
- Lovejoy, M.C., Weis, R., O'Hare, E., & Rubin, E. C. (1999). Development and initial validation of the parent behavior inventory. *Psychological Assessment*, 11, 534-545.
- Matsuishi, T., Nagano, M., Araki, Y., Tanaka, Y., Iwasaki, M., Yamashita, Y., Nagamitsu, S., Iizuka, C., Ohya, T., Shibuya, K., Hara, M., Matsuda, K., Tsuda, A., Kakuma, T. (2008): Scale properties of the Japanese version of the Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain and Development*, 30, 410-415.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L.B. (1979). Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.

Shelton, K.K., Frick, P.J., & Wootton, J. (1996). Assessment of parenting practices in families of elementary school-age children. *Journal of Clinical Child Psychology*, 25, 317-329.

塩川宏郷 (2007). 不登校と発達障害. *現代のエスプリ*, 474, 205-211.

Keith Conners 著, 田中康雄監訳, 坂本律訳 (2011). *Conners 3™ 日本語マニュアル*. 金子書房, 東京.